

内閣総理大臣賞受賞

地域のブランド「須佐 男命いか」で賑わう漁村づくり

受賞者 須佐地区一本釣船団
(山口県萩市)

■ 地域の沿革と概要

萩市は、山口県北部に位置し、日本海に面している。平成17年3月に1市2町4村が合併し、総面積は698.79km²である。旧萩市の阿武川河口部に形成された三角州とその周辺に市街地があるほかは、臨海部になだらかな低地が広がっている程度で、山地が大半を占めている。中山間地域の農山村景観、北長門海岸国定公園に指定されている美しい海岸線、国指定の名勝及び天然記念物の「須佐湾」など、自然に恵まれている。

気候は、沿岸部においては対馬海流の影響を受けて比較的温暖であり、中山間部においては盆地特有の気候で、変化に富んだ豊かな自然環境を有している。

萩市は、毛利藩政期の城下町のたたずまいが都市遺産として現存しているまちで、「明治維新胎動の地」として全国有数の観光都市である。また、山口県内でも有数の農林水産業の盛んな地域で、農業では、水稻、野菜、果樹、畜産などの産地が形成されている。水産業においては、アジ、サバなどのまき網漁業やイカなどの一本釣り漁業等が主体に営まれている。

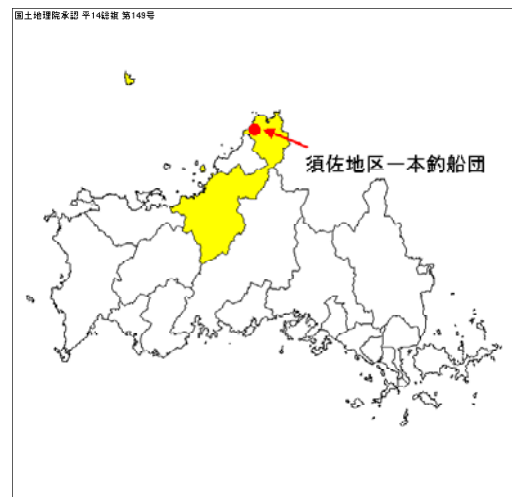
■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

須佐地区（旧須佐町）は、萩市中心部から約35kmほどの萩市の東部、島根県との県境近くに位置している。三方を山々で囲まれた小さな町で、ほとんどが山間地域で平地は少なく、山間部で水田農業を営む農業集落と「須佐湾」の入り江に整備された須佐漁港周辺の漁業集落で地区を形成している。

地区の世帯数1,376戸のうち、漁業集落4集落の世帯数は341戸で、そのう

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

第1表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	旧市町村単位の集団等	
組織の性格	機能的な集団等	
漁家率 (内訳)	8.6%	
	総世帯数	1,376戸
	漁家数	119戸
漁業世帯 (内訳)	個人経営体	73戸
	うち専業	68戸
	兼業(主)	5戸
主要漁獲物 (内訳)	いか類	101百万円
	ぶり類	13百万円
	たい類	4百万円
	貝類	16百万円

ち70戸が漁家である。漁家は、そのほとんどが専業漁家であり、一部が第1種兼業漁家である。

地区の漁業は、5t未満の船舶によるイカ釣りなど一本釣り漁業のほか、採貝漁業、磯建て網漁業などが営まれ、平成24年度の漁獲量は162t、漁獲高は20,264万円である。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

須佐地区の基幹産業である漁業の漁獲高は、水産資源の減少、バブル崩壊後の魚価の低迷などにより、昭和57年の約9億円をピークに減少を続けた。漁業者数の減少に高齢化も重なり、須佐地区の漁村は衰退の一途をたどっていくことが懸念された。

こうした中、須佐地区の漁獲高の40%を占める一本釣り漁業者で構成する須佐地区一本釣船団（以下「一本釣船団」という。）は、平成10年、漁村の再活性化のためには、漁業者の所得向上を図っていくことが重要と考え、一本釣りの水揚量の60%を占めるケンサキイカの魚価向上対策を行っていくことを決定した。

ア イカ祭りの開催

ケンサキイカの魚価向上を図っていくとしても、売れなければ意味がないことから、まず須佐産ケンサキイカについての消費者の認知度及び需要度を把握することが必要と考えた。一本釣船団は、漁協関係者や観光協会等の関係機関へ協力を要請し、平成11年7月27日に「第1回イカ祭り」を開催した。予想を上回る盛況となり、第2回以降はケンサキイカの旬の時期である7月27日に毎年開催することとした。

イ 活イカ直売市の開催

第1回目のイカ祭りは、用意した鮮イカ（締めた状態のイカ）60kgが短時間で売り切れるなど、ケンサキイカのニーズが非常に高いことを認識する機会となり、一本釣船団において、更なる付加価値向上の取組について検討が始まった。

当時、イカの出荷については、約82%が鮮イカとして地元市場に出荷され、約18%が活イカ（生きた状態



写真1 活イカ直売市

のイカ）として県内外の活魚業者に出荷されていた。しかし、夏場のイカが多獲時期には鮮イカの市場価格が大幅に下がり、イカ資源の減少とも相まって、一本釣り漁業者の経営は不安定なものとなっていた。

一本釣船団は、付加価値の高い活イカの販売を増やしていくことが所得向上への足掛かりになると考え、平成12年、漁業者自らが活イカを販

売する直売市を行うこととし、水産庁の「意欲ある担い手の確保・育成のためのモデル事業」を活用して、直売用の2t水槽2基を須佐漁港の岸壁に整備した。

水槽の整備について、漁業者の中には否定的な意見もあったが、当時の役員は「須佐の活性化のため今動かなければ漁師も漁村も消えてしまう」と説得を続けた。度重なる協議の末、漁業者による販売体制を構築し、平成12年の第2回イカ祭りから直売市を開始した。以降、毎年7月～9月の毎週土日に開催することとしたが、予想を上回る盛況ぶりで用意した活イカが瞬く間に売り切れ、購入できなかった多くの消費者から「もっと販売量を増やしてほしい」との声が聞かれ、消費者の需要に応えられる活イカの確保が課題として浮き彫りとなった。

ウ 活イカ蓄養水槽の整備

活イカを安定的に出荷するためには、水揚げしたイカを生かしておける蓄養水槽の整備が必要であり、一本釣船団において検討が始められた。

蓄養水槽の設置に向けた協議では「イカを生かせる海水は確保できるのか」、「ランニングコストは誰が負担するのか」などのほか、船団長に対する「須佐をどうするつもりなのか！」といった厳しい意見もあり、新たな取組に向けた協議は簡単にはまとまらなかった。

しかし、「須佐のために今動くべき」との強い信念を持つ当時の船団長が中心となり、船団員の家を丁寧に説明して回り、その献身的な姿勢が認められ、一本釣船団の総意として、平成13から14年度にかけて水産庁の「中核的漁業者協業体育成事業」、平成16年度には「沿岸漁業構造改善事業」により



写真2 蓄養水槽の整備

蓄養水槽24基の整備を行い、活イカの供給体制が構築された。

エ 須佐産ケンサキイカのブランド化推進の取組

活イカ蓄養水槽の整備により、活イカの出荷も順調に増加していったが、活イカを取り扱う業者は県外の業者がほとんどであり、「須佐産」という表示で消費者に届いていないケースがほとんどであった。このため、須佐産ケンサキイカの認知度を高め、須佐地区にイカを食べに来てもらえるようにしたいとの思いから、一本釣船団の呼びかけで漁業関係団体、商工会、観光協会等で構成する「須佐 男命いかブランド化推進委員会」（以下「ブランド化推進委員会」という。）が平成18年に発足し、以降、「須佐 男命いか」のブランド化を軸に「イカの町須佐」として歩み始める土台となった。

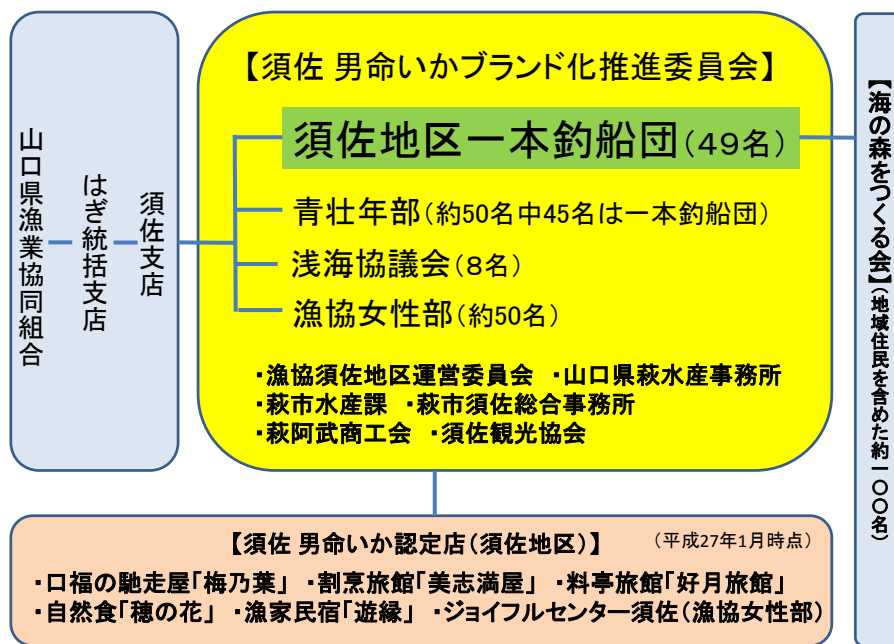
(2) むらづくりの推進体制

一本釣船団の活イカ出荷を拡大する取組や「須佐 男命いか」のブラン

ド化を推進する活動によって、地区の様々な団体や人々が触発され、地区全体で「須佐 男命いか」を盛り上げる活動が展開されている。

ブランド化推進委員会は、一本釣船団を中心に、須佐地区^{せんかい}浅海協議会、漁協青壮年部、漁協女性部に萩阿武商工会、須佐観光協会、山口県萩水産事務所や萩市も加わり、「須佐 男命いか」のブランド化による漁村地域のむらづくり活動を推進している。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

一本釣船団は、地域漁業の再建には漁業者の所得向上・安定が必要と考え、地域資源のケンサキイカに着目し、消費者ニーズを捉えるため試験的に事業を実施しながら、付加価値の高い活イカの出荷拡大を進めた。新事業を始める前には合意形成を図り、船団員総意の下で実行していることも特徴である。

一本釣船団が団結して事業に取り組んだ結果、イカのブランド化、イカを提供する認定店制度の導入、遊覧船の運航等、地域をあげて「イカの町須佐」を盛り上げるまでに発展し、食事提供や加工品製造等に携わる女性の活躍もむらづくり活動を支え、県内外からの観光客増加による地域の経済効果につながっている。

2. 漁業生産面における特徴

(1) 活イカ出荷における効果

一本釣船団が平成12年に始めた活イカ直売市が定着したことにより、県内各地はもとより、県外から大型バスで団体旅行やツアーの客が「須佐 男命いか」の食事を求めて須佐地区を訪れるようになり、活イカ出荷の拡大につながった。

また、平成13から16年にかけて蓄養水槽を整備したことにより、これまで鮮イカとして出荷していたものを単価の高い活イカの状態でお届けすることが可能となった。須佐地区では、イカ資源の減少によって漁獲量や所得の減少が危ぶまれていたが、単価の高い活イカの出荷割合が増加したことで所得の安定につながっている。(活イカ出荷量の割合 平成10年2割→平成25年5割)

さらに、鮮度の高いイカを少量獲得する方法を採用することによって、操業時間が短縮され、燃料等の経費の節減につながっている。そして、減少しているイカ資源への負担が小さくなることから、将来にわたって資源を持続的に利用していくことができるものと期待されている。

(2) 「須佐 男命いか」ブランドの確立

ア 「須佐 男命いか」の商標登録

一本釣船団は、須佐産ケンサキイカのブランド化を推進するためには、消費者に親しみを感じてもらえるネーミングが必要と考えた。そして、須佐の地名の由来といわれている須佐之男命（すさのおのみこと）伝説から、須佐産ケンサキイカを「須佐 男命いか（すさみこといか）」と名付け、平成18年4月に商標登録するとともに、翌19年には、「須佐 男命いか」のホームページを開設した。

イ 「須佐 男命いか認定店」制度の創設

ブランド化推進委員会は、地元飲食店等と連携し、生きた須佐産ケンサキイカのみを取り扱う「須佐 男命いか認定店」制度を設けて、平成18年に須佐地区内の6店舗を認定し、ブランドの情報発信と出荷先の重要拠点としての役割を担ってもらうこととした。ブランド化推進委員会は、その後も認定店拡大に努め、現在の認定店数は須佐地区以外の店舗も含めて11店舗まで拡大している。土日祝日には、認定店にイカの食事を目当てにする観光客が訪れ、大盛況となっている。



写真3 認定店「梅乃葉」

ウ 「須佐 男命いか」PR事業の展開

一本釣船団は、活イカの直売市に訪れた顧客に対する感謝の意を込めて、直売市開催10年目に当たる平成21年から保育園や老人ホーム等福祉施設に「須佐 男命いか」を贈呈している。

また、県内の下松市くだまつしにおける大型ショッピングセンターで開催される「道の駅フェスタ」等の交流イベントに「須佐 男命いか」をトラックで生きたまま搬送し、漁業者が都市住民へ直接PRして販売を行う事業も始めており、その魅力を更に発信している。

エ マスメディアへのPR

直売市やブランド化推進事業など、一本釣船団の取組を積極的にマス

メディアにPRすることによって、県内はもとより県外からも多数のテレビ局や新聞社などが取材に訪れ、萩市須佐とブランドイカの知名度向上に寄与している。

オ 外部人材の活用と後継者の育成

平成13年に山口県のニューフィッシャー確保育成推進事業により、三重県から当時20代の男性が、また平成16年には、漁業就業への思いから大阪の大手家電メーカーを中途退職して須佐にIターンした50代の男性が、それぞれ須佐地区で一本釣り漁業に就業した。なお、「須佐 男命いか」のブランド化やPRは、この50代のIターン者のノウハウを取り入れたものである。このように、一本釣船団は、地域外から就業希望者を受け入れるとともに、船団員が意見やアイデアを自由に発言できる組織運営に努めている。

また、一本釣船団は、漁業就業希望者を対象とする山口県主催の説明会等において、一本釣り漁業の魅力を発信するとともに、就業希望者の相談対応や研修の実施を行うなど、新規漁業者の育成にも努めている。

カ 6次産業化への取組

一本釣船団の取組によって、Iターンでの漁業就業者を含む若いイカ釣り漁師たちが刺激され、活イカに回らない須佐産ケンサキイカを漁師自らが一夜干しや沖漬に加工する事業が平成26年から始まった。これらの加工品は、須佐地区の特産品販売所などで販売され、観光客から好評を得ている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) ケンサキイカで広がる交流

須佐観光協会は、国の名勝及び天然記念物となっている「須佐湾」を漁船で遊覧する観光業を営んでいる。イカを求めて須佐地区を訪れる観光客が増えたため、「須佐を楽しむ観光プロジェクト」として平成23年に漁船での観光遊覧船を運航してみたところ、観光客から好評を得た。これを受けて、須佐観光協会は平成24年から観光遊覧船に乗船するツアーを本格的に開始しており、一本釣船団を中心とした漁師が漁船での観光遊覧船を運航し、地域住民がボランティアとして案内役を行っている。



写真4 漁船による観光遊覧船

今では、観光遊覧船の乗船と「須佐 男命いか」の食事がセットとなったツアーが定着し、漁業者と都市住民との交流機会が増えている。

(2) 女性の取組

一本釣船団のブランド化に向けた取組により、漁協女性部も動き出した。活イカ直売市の開催に併せて、平成22年から7月～9月の土日に、漁協女

性部が運営する加工直売所「ジョイフルセンター須佐」において、「須佐 男命いか」の生き造りや漁師のおかみさんによる手作り料理の提供を開始した。

女性部は、イカ飯や一夜干しの加工も行っているほか、バスツアー客に対し、イカの捌き方やイカの塩辛づくりの体験教室も開催し、好評を得ている。

(3) 漁場環境改善への取組

藻場は、魚介類が産卵し、ふ化した稚魚が成育する「海のゆりかご」としての機能に加え、海水の浄化や二酸化炭素の吸収など地球環境保全においても重要な役割を担っている。しかし、近年の海水温の上昇や海の変化、豪雨災害による土砂の海への流入等により、須佐地区の海においても藻場が失われるなど漁場環境の悪化が進んでいる。

このことに懸念を持った地元の漁業者が中心となり、藻場の再生のために地元の園児や小・中学生とともに海藻類の移植作業を行っている。また、水産資源の回復を図るとともに、地域の魚や海に親しみを持ってもらうために、稚魚放流事業にも取り組んでいる。

そのほか、一本釣船団長の呼びかけによって「海の森をつくる会」が平成24年に発足しており、地区住民に会の主旨が浸透して会員数は約100名に及んでいる。森から流れ出た養分が川を通って海に注ぎ、植物プランクトンを育て海の恵みをもたらすことから、会では林業振興会や地元中学生とともに山で植樹を行い、森づくりにも取り組んでいる。



写真5 藻場再生活動

(4) 伝統文化の継承

一本釣船団員を中心に組織されている須佐地区漁協青壮年部は、江戸時代から行われている伝統文化「弁天祭」を現代に受け継いでいる。祭りでは、毎年7月27日、28日、神輿に弁天様を乗せ、神子舞、管弦曲、船歌などを行いながら、湾内入江の弁天島まで管弦船を巡航している。

(5) 「イカの町 須佐」のPR

平成20年、須佐出身のアニメソング歌手の「きただにひろし」氏による「男命いかの唄」が完成し、その唄にちなんだ「女の子漁師：藻えキャラクター 海野みこと」を公募・決定し、須佐観光PRに活用している。

(6) 災害復興

平成25年7月28日の集中豪雨により須佐地区を流れる須佐川が氾濫し、床上浸水が300戸以上という大災害が発生した際、一本釣船団員や漁協関係者は、被災家屋の片付けなどの中心的役割を担い、地区の復旧活動に尽力した。